

モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査情報

2013年9月号 Vol.5 No.1

Cinclus pallasii
Photo by Hiroshi Uchida

結果速報

モニタリングサイト1000 2012年度越冬期 一般サイト結果速報 森本 元(日本野鳥の会)

全国約1,000か所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは419か所を占める重要な分野です。調査には、多くの市民調査員のみなさまにご協力いただいております。森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、陸生鳥類調査(繁殖期および越冬期)および植生概況調査(繁殖期のみを実施)をすることにしています。2012年度の越冬期は、調査実施予定だったサイトから、積雪などで予め調査が困難とされるサイトを除いた森林59サイト、草原10サイト、計69サイトに調査をお願いしました。昨年は、東日本大震災に伴い、調査者の被災状況が不明であったため当初予定した調査を取りやめたサイトがありましたが、今年度は大震災の影響を受けた県のサイトでも調査を実施することができました。ここでは、依頼した中から調査を実施できなかったサイトなどを除き、本原稿執筆時にデータが集まっている森林47サイト、草原7サイトの計54サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

記録された鳥類

合計107種(森林94種・草原57種)の鳥類が確認されました。森林サイトのみを比較しますと、これは昨年の森林108種よりも少ない値となっています(草原サイトはサイト数が少なく年変動が大きいことから比較していませんが、森林・草原の昨年の合計は137種です)。2012年度の調査サイト数は前年度の約3/4に減っているため、この影響によるものかもしれません(2011年度越冬期の森林は62サイト)。森林における出現率、優占度の上位種を表1に示しました(出現率:ある種の出現サイト数÷調査サイト数,優占度:サイト

表1. 2012年度越冬期の森林サイトにおける出現率(%)と優占度の上位種

a) 森林サイトの出現率 (n=47)			b) 森林サイトの優占度 (n=47)		
順位	種名	出現率	順位	種名	平均優占度
1	ヒヨドリ	91.5	1	ヒヨドリ	11.7
2	ヤマガラ	87.2	2	メジロ	9.6
3	ハシブトガラス	85.1	3	エナガ	7.3
4	シジュウカラ	80.6	4	シジュウカラ	6.9
5	コゲラ	80.6	5	ハシブトガラス	5.8
6	メジロ	68.1	6	ヤマガラ	4.6
7	シロハラ	66.0	7	ヒガラ	4.2
8	ウグイス	61.7	8	コゲラ	3.6
8	ウソ	61.7	9	マヒワ	2.9
10	エナガ	59.6	10	シロハラ	2.8

表2. 過去4年間(第2期 2008-2011)の越冬期の森林サイトにおける出現率(%)の上位5種にランクインした種

順位	種名	順位	出現率
1	ヒヨドリ	1-2	90.1-90.7
2	ハシブトガラス	1-3	95.1-86.7
3	コゲラ	2-4	87.5-83.9
4	シジュウカラ	3-4	85.5-80.0
5	エナガ	5-6	81.8-66.7
6	ヤマガラ	5-6	81.8-74.2

表3. 第2期5年間の越冬期の草原サイトにおける出現率(%)と優占度の上位種

a) 草原サイトの出現率 (n=50)			b) 草原サイトの優占度 (n=47)		
順位	種名	出現率	順位	種名	平均優占度
1	ハシボソガラス	94.0	1	ホオジロ	10.8
2	ハシブトガラス	92.0	2	ハシブトガラス	8.7
3	ヒヨドリ	78.0	3	スズメ	8.6
4	カワラヒワ	74.0	4	カワラヒワ	6.9
5	ホオジロ	72.0	5	ハシボソガラス	5.2
6	ツグミ	68.0	6	ヒヨドリ	4.5
6	トビ	66.0	7	ムクドリ	3.3
8	モズ	50.0	8	カシラダカ	2.9
8	ノスリ	50.0	9	ツグミ	2.5
10	スズメ	46.0	10	カワウ	2.5
10	シジュウカラ	46.0			
10	ウグイス	46.0			

でのある種の個体数÷総個体数を平均したもの)。出現率を見てみますと、第1期(2004~2007年度)および第2期(2008年度~2012年度)の上位種は、年により種の多少の入れ替わりはありますが、ほぼ一致しています。これまでの第2期の出現率の上位10種はウグイス、エナガ、カケス、カワラヒワ、キジバト、コゲラ、シジュウカラ、シロハラ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、メジロ、ヤマガラ、ルリビタキ(五十音順)のいずれかでした。とくに上位種は安定しており、第2期ではこれまで上位5種はほぼ同じ種でした。これら第2期過去4年間の出現率の上位種を表2に示しました。しかし今年度は変化があったようです。初めてヤマガラが2位に躍進しています(表1)。これについては、詳細に後述します。他には、ウソがトップ10に初登場です。

草原サイトの結果は現時点での第2期全体の上位10種を示しました(表3)。調査サイト数が少ない草原サイトは森林サイトよりも、年と年間で順位の入替わりが激しいため、年同士の比較が難しいのが実情です。しかし、第2期の最終年度である今年度は、期間全体を扱えます。出現率の上位はカラス類やヒヨドリなど、おなじみの身近な種たちでした。ノスリが上位10位内に食い込んできたのは、意外な結果ではないでしょうか。これをふまえて次の第3期での

順位の変化にも注目したいところです。

越冬期上位種の動向の変化

前述のとおり表2において第2期のこれまでの森林サイトの上位5種を示しました。年によって多少の順位変動はありますが、上位3種は過去4年間で、ヒヨドリ、ハシブトガラス、コゲラでした。そして、そこにシジュウカラ、エナガ、ヤマガラが続きます。このように、出現種も順位もほぼ固定され安定した結果が続いていました。しかし今年は、長年5-6位だったヤマガラの順位が急上昇して2位になっています(表1)。一方で、コゲラは順位を落としています。さらに、エナガが10位へ転落しています。エナガの今年の出現率59.6%は、過去の出現率(81.8-66.7%)よりもさらに低い値でした。今年度のコゲラの80.9%も過去最低の値です。それに反するように、順位を上げたヤマガラの出現率87.2%は過去最高の値でした。なお、これら上位種のうちヤマガラ、コゲラ、エナガは、同じサイトで出現する傾向があることが第1期の調査結果からわかっています(例えば、コゲラがいるサイトではヤマガラやエナガも観察されやすい傾向があるということです)。今回のヤマガラのランクアップと、エナガ、コゲラのランクダウンという結果は、これに反した動きです。3-4ページにも書いてあるように、この冬、ヤマガラはコアサイトや低地の公園でも多かったので、繁殖成績が良かったりといった今年の特異な事情の可能性があります。もしかすると各サイト内の微妙な生息環境の変化が関連しているのかもしれませんが(例えば枯死木の減少や照葉樹の増加など)。温暖化や人為活動による環境変動は鳥

類の生息環境を変化させると考えられており、こうした鳥種の組み合わせの傾向を変化させる背景になりうることも想定されます。

なお、本結果は中間報告であり、未集計のサイトが今後追加された際に、結果が変動する事がありますので、ご注意ください。

長期継続調査の結果を横断的に概観することにより、このような変化が読み取れ、モニタリングサイト1000の有用性をご理解いただけたと思います。日本の環境変化のモニタリングのためには、調査の継続と多くの方々のご協力が欠かせません。引き続き、皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

2012年度越冬期の一般サイト調査には、62名の皆様の

調査へのご協力ありがとうございました

ご協力をいただきました。最後にお名前を記し、お礼に代えさせていただきます。

井上史子, 猿子正彦, 志摩俊樹, 谷岡仁, 手塚修平, 藤原美菜, 村田愛沙, 山下大地, 山元嘉基, 吉原努, 井上かよ子, 一戸静夫, 稲田菊雄, 横山大八, 梶畑哲二, 関川實, 吉田捷三, 久高将和, 幸徳行, 江口初男, 佐藤重穂, 山形達哉, 山口雅生, 山田洋治郎, 似内功孝, 篠崎知明, 手塚理一郎, 首藤直美, 出口敏也, 小園卓馬, 小粥秀治, 小嶋明男, 小林繁樹, 上谷川則男, 森永太一, 森本元, 秦野英徳, 瀬川強, 西村公志, 青山輝久, 川崎康弘, 前田和浩, 早川貞夫, 村田章, 村濱史郎, 大岩憲治, 大平茂勝, 谷岡 仁, 丹野栄一, 丹野弥生, 池野進, 中原聡, 渡辺博光, 藤原正貴, 梅津節雄, 梅木賢俊, 野津幸夫, 有田茂生, 有馬宏幸, 葉山政治, 鈴木創, 濱田哲暁

結果速報

今年の鳥のさえずり状況 ～ ライフ音配信の聞き取り結果から ～ 植田陸之(バードリサーチ)

コア・準コアサイトのうち、秩父、志賀おたの申す平、富士の3サイトでは、東京大学が中心となって、インターネットを通して森のライブ音を聞き取れるような仕組みをつくっています。それをつかって朝の鳥のさえずりの様子をモニタリングしていますので、その結果をご紹介します。

秩父サイトでは2011年から聞き取りを行なっていますが、過去2年と比べ、さえずりはじめの時期は中間くらいでしたが、さえずりの活発さが落ちるのはやや早い感じでした。巣箱でヤマガラの繁殖モニタリングをしていますが、今年の繁殖は過去より早かったため、夏鳥も渡来後、すぐ繁殖して、さえずりが早く不活発になったのかもしれません。

おたの申す平では、昨年より調査を開始し、今年は2年目です。昨年と比べウグイスやクロジのさえずりが活発になる時期は遅く、カッコウ類は逆に早くからさえずりが活発でした。今年は3月は例年より暖かでしたが、4月は寒く、5月は平年並みになりました。こうした気温の影響を受け、4月にさえずりだす種と5月にさえずりだす種の差が出たのかも

しれません。

まだ3年分しか情報がないので、すべてが想像にすぎず、気温なのか、積雪なのか、開葉時期なのか、何が原因で年変化が起きるのかはわかりませんが、今後モニタリングを続けて明らかにしていきたいと思っています。

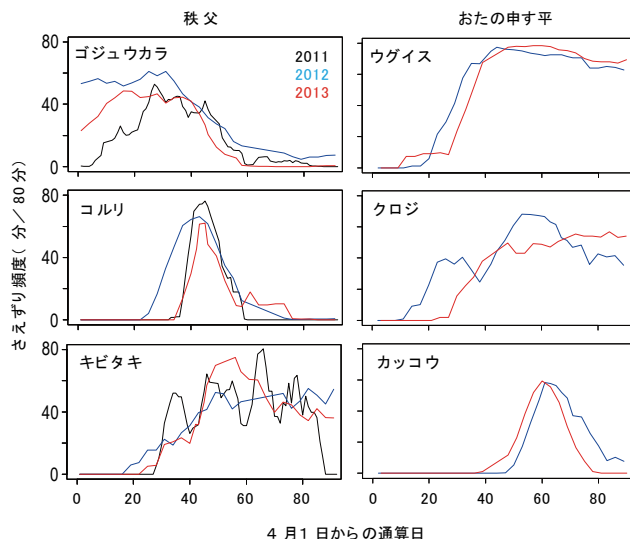


表 1. 2012年度越冬期の森林サイトにおける出現率と優占度の上位種

結果速報

2012年度 コア・準コアサイト鳥類調査 越冬期結果報告

植田睦之(バードリサーチ)

2012年の越冬期は、18サイトで調査を行ないました。一部調査のできていないサイトもありますが、これですべてのコア・準コアサイトで調査が行なわれたこととなります。これまでに得られた結果をあわせて全国の鳥類の状況についてご報告いたします。

過年度の調査結果との比較

2012年度までの記録種数およびバイオマスをみると(表1)、特にバイオマスは年による変動が大きいのがわかります。これは繁殖期が比較的安定しているのと比べると対照的です。越冬期はカラ類なども群れで活動しているので、こうした群れが記録できるかどうかという確率的なばらつきもありますが、群れで越冬するツグミ類、アトリ類などの渡来数の多少といった年変動による影響がより大きいと考えられます。このことは積雪や寒波により、渡来数の変動が大きいと考えられる北のサイトの方がバイオマスの変動が大きいことから支持されます。

表 1. 2009~2012年越冬期コア・準コアサイトの確認種数とバイオマス

サイト名	越冬期確認種数				越冬期バイオマス(kg/10ha)			
	2009	2010	2011	2012	2009	2010	2011	2012
雨龍	8	12	8	8	2.83	6.66	0.63	1.02
野幌		20				21.44		
苫小牧	15	16	14	12	5.98	25.83	22.38	22.97
青葉山		28				79.11		
小佐渡	24	21	22	20	11.97	14.09	18.88	10.47
那須高原	22	18	19	19	5.14	2.31	12.70	3.56
小川	25	27	15	23	10.57	22.68	10.84	7.41
高原山	14					5.01		
筑波山	23					11.12		
大山沢	14	16	15	12	3.78	2.37	4.36	3.24
秩父	19	17	18	20	3.55	3.26	10.39	5.84
西丹沢	15				6.43			
富士			22				15.88	
函南		21				8.35		
愛知赤津	14	12	11	12	9.02	10.85	12.53	7.24
上賀茂	19	22	16	21	23.79	15.61	33.13	23.41
春日山			23				32.26	
和歌山	17	9	14	13	7.52	1.05	6.05	1.84
半田山			14				1.74	
宮島	18				115.43			
市ノ又	12	14	13	15	3.16	5.43	4.64	2.73
佐田山				18				13.41
対馬龍良山				14				6.31
粕屋			17				15.43	
椎葉	21				7.46			
綾		20	18	13		4.99	3.92	4.32
田野	18	21	16	19	12.63	13.55	5.61	9.71
屋久島照葉樹林		13				22.51		
屋久島スギ林				11				2.73
奄美	16	20	15	13	30.62	35.49	10.21	14.27
与那	17	17	13	18	38.98	30.44	23.33	20.04
西表	15				18.13			
小笠原石門			5				3.35	

少なかったヒガラと多かったヤマガラ

4ページで紹介していますが、2012年度の冬は低地でヒガラやヤマガラ、ウソなどが多かったことが話題になりました。またツグミも少なかったといわれた2011年度とは異なる

り、普通に見られました。2011年度の冬は山の木の実が豊作で、2012年度が凶作だったことから、山の食物不足で2012年度は低地に鳥が多かったのではないかと考えられています。そこで、実際にこれらの鳥たちが山で少なかったのかどうかをデータでみてみました。

ツグミについてみてみると、予測通り、小川サイトを除き、2012年度は2011年度より記録数が減っていました(図2)。小川サイトは、標高600mと比較的低い山で、2011年度に個体数が少なく、2012年度は多いという低地と同じ変動を示していました。ツグミにとって小川サイトは山地よりも低地的な場所に位置しているのかもしれませんが。

ヒガラもほとんどの場所で2012年度は個体数が減少していました。増加していたのは、市の又、上賀茂そして小佐渡。市の又と上賀茂はヒガラが記録されたもっとも南の調査地の2つです。おそらく山地から低地に移動するという標高方向への動き以外に北から南に移動するという南北の動きもあって、そのためこれらのサイトでは個体数が増加したのだと思います。また、小佐渡については佐渡が「島」だという特性が効いているのではないかと考えられます。積雪の多い北側の大佐渡から、積雪の少ない小佐渡への島内の移動があって、そのため小佐渡でヒガラが多くなったのかもしれませんが。小佐渡については全国的な傾向からみてバイオマスが多かったりするなど、他地点と違うところが多々あります。それらについてもこの島内移動の影響が効いているのではないかと考えています。

それに対してヤマガラは、ほとんどの場所で多く記録されました。このことは、不作で山から低地に移動したという推測と矛盾します。昨年、少なくとも秩父サイトではヤマガラの繁殖成績が例年より良かったので、もしかすると、繁殖成績がよくて増えたヤマガラが山から押し出されて低地に来たのかもしれませんが。

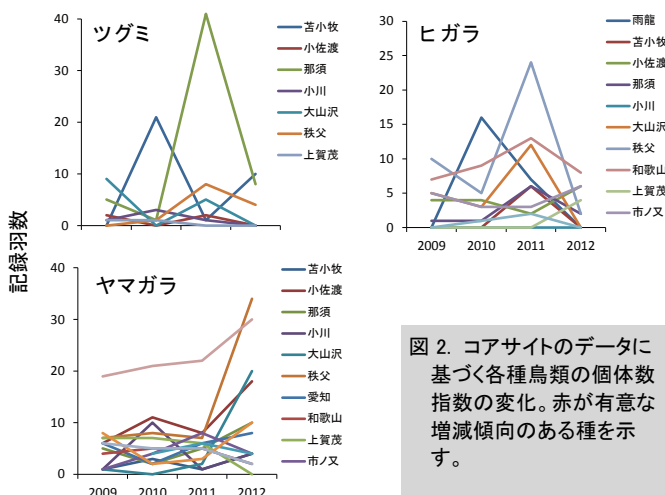


図 2. コアサイトのデータに基づく各種鳥類の個体数指数の変化。赤が有意な増減傾向のある種を示す。

調査ありがとうございました

2012年の現地調査にあたっては、岩本富雄、植田睦之、川崎慎二、河野雅志、佐藤重穂、杉原 敏、外間 聡、高美喜男、中村豊、西 剛、沼野正博、原田 修、平野敏明、藤江昌代、松井理生、柳田和美(敬称略)ほか多くの方々のご協力をいただきました。皆様に感謝いたします。

この記事はバードリサーチニュース 10(4): 1 に掲載された記事を加筆改訂し、転載したものです

この冬は西高東低 ～冬鳥アンケート等の結果から～ 植田陸之・平野敏明

前号でご協力をお願いいたしました冬鳥アンケートにご協力いただきありがとうございます。98名の方から130件の情報をお送りいただきました。

2012年度の冬は低地の公園でヒガラやヤマガラ、ウソが見られ、冬鳥の当たり年だといわれましたが、この「冬鳥アンケート」とバードリサーチが独自で行なっている「冬鳥ウォッチ」の結果から、北海道など東では鳥が少なく、四国九州など西で多いという傾向がみえてきました。

昨年と正反対だったツグミ

2011年度の冬はツグミが関東以西の低地で見られなかったことが話題になりました。アンケートの結果、北の地域や山では逆に多く、木の実が豊作だったため北や山から下りてこなかったのではないかと推測されました。一方12年度は正反対。北や標高の高い地域で少なかったことがわかりました(図1)。今年は木の実が凶作だったので、昨年と逆のことがおきていたのかもしれません。

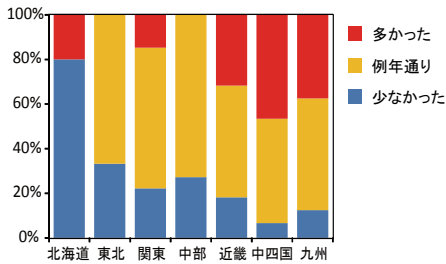
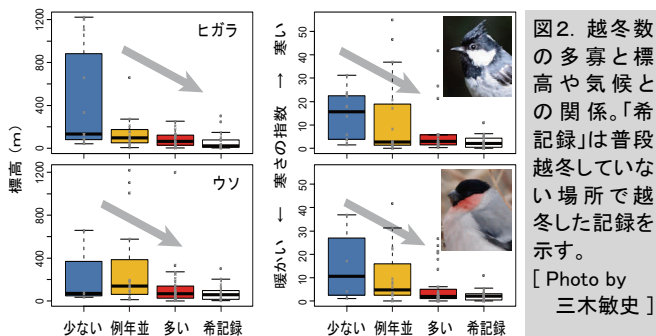


図1. アンケート調査による2012/13年冬のツグミの越冬数の多寡の地理的な分布。北海道や東北など東日本では例年より少なく、近畿以西では多いという結果だった。

ヒガラは山を下りてきた？

他の鳥でも同様の傾向がありました。図2はヒガラとウソの結果です。どのグラフも右肩下がりで、「多い」「普段は越冬していないが今年は越冬した」という情報は低標高地や温暖な地域に集中しています。ヒガラは標高1200mの秩父コアサイトでは例年優占種なのですが、今年はほとんど観察されず、反対に普段いない自宅そばの雑木林で群れて越冬していました。山を離れ低地に下りてきたのだろうかと思いが膨らみます。



アトリも西高東低

越冬数をランクに分けて定量的な情報を収集している「冬鳥ウォッチ」でも、12年度の冬鳥が西で多かったことが示されています。アトリは昨年は中部山地帯で200羽以上の群れが観察されましたが、今年は中部山地帯で200羽以上の群れはなく、去年は記録のなかった中国、四国、九州で記録されました(図3)。マヒワは北海道などでしか記録されなかった昨年と一転して全国で記録されましたが、大きな群れはあまり記録されませんでした。

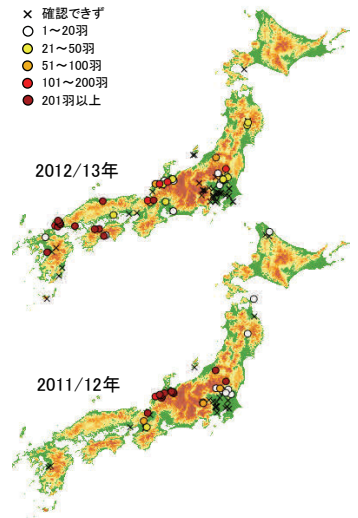


図3. 2012/13年冬と2011/12年冬のアトリの記録状況。

年変動の原因は？

冬鳥の年変動の原因として、木の実の豊凶が考えられます。11年度と12年度の冬の様子は木の実の豊凶で説明できる部分が多くありそうです。これが普遍的にいえることなのかどうかは、もうすこし長期間見ていく必要があります。たとえば今年、秩父のコアサイトでは、たくさん実っていたイヌブナが次々茶色くなって、多くは落下してしまいました。おそらく今年のイヌブナは不作かよくて並作でしょう。これが全国的な状況だとしたら、今度の冬も低地で多くの冬鳥が見られかもしれません。そうした年変動を注視しつつ、種子食の鳥、昆虫食の鳥、果実食の鳥といった各種鳥類の生態と変動との関係もあわせて検討することで、原因を追究していきたいと思います。



図4. 秩父コアサイトの枯れてしまったイヌブナの実。

また冬鳥ウォッチから、マヒワとアトリの年変動が必ずしも一致しないことがわかってきています。これは日本の木の実の豊凶ではなく、繁殖地の状況が影響していることを示唆しています。アトリの方が北で繁殖しているの、繁殖地の違いによる繁殖成績の不一致が越冬飛来数の変動の不一致を生んでいるのでしょうか？ 繁殖地の気象条件の比較や、繁殖地の研究者との交流をとおして検討していきたいです。

■ 調査結果の詳細はWebに掲載しています。
冬鳥アンケートの結果 bit.ly/110NFfe
冬鳥ウォッチの結果 bit.ly/110Nuk7

モニタリングサイト1000 他分野情報

モニタリングサイト1000里地調査での鳥類調査の成果

高川晋一(日本自然保護協会)

モニタリングサイト1000里地調査(以下 里地調査)は、日本自然保護協会が事務局となり、2005年から始まったプロジェクトです。調査の設計や体制において特徴的なのは、①個人ではなく各地域の市民団体が主な調査の担い手となっている、②調査は9つの項目から選択して実施し、鳥だけでなく植物や哺乳類といった複数項目を実施しているサイトが多い、③基本的に全サイトで毎年調査を行っている、といった点です。複数項目の調査を実施することで里山の自然環境の変化を総合的に捉えると共に、地域で活動を続けてきた市民団体を調査の主体とすることで、調査結果が各サイトの保全に直接活用されることを目指しています。

森林面積が種数に影響

全国の調査サイトは約200か所です、そのうち鳥類調査を実施しているのは約100サイトです。鳥類の調査は第1期の森林・草原分野の手法と全く同じ方法(ルートセンサス法)を採用しています。約180か所の一般サイトでの調査が本格的に始まったのは2008年度であるため、モニタリング調査としてはまだ十分な年数は経過していませんが、それでも様々な知見が得られつつあります。例えば、周辺に森林が少ない調査サイトほど、鳥類をはじめ哺乳類や植物の記録できる種数が少ないことが分かりました(図1)。また、2009年から2011年にかけて主要な鳥類の個体数が全国的に減少し、その後増加するといった変動を捉えることもできました(図2)。これはおそらく天候不順など気候が原因となった自然な変動だと思われます。その他に、赤外線センサーカメラをつかった哺乳類調査では、トラツグミやヤマドリなどの林床性の鳥類が頻繁に撮影されたり、オオタカの捕食シーンなど珍しい写真が撮影されることもあります。なお、里地サイトでよく記録される鳥類の顔ぶれは森林サイトとほとんど同じで、ヒヨドリ、ウグイス、スズメ、シジュウカ

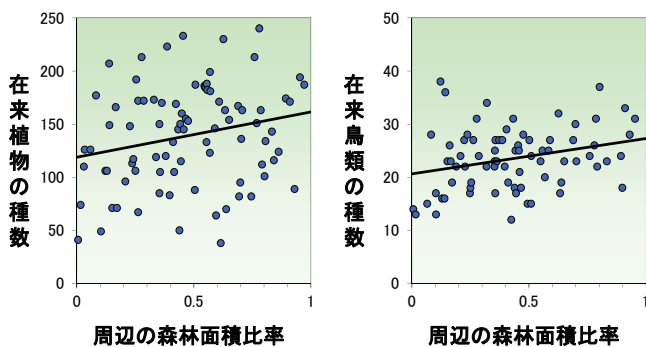


図1. 各サイトで記録される植物と鳥類の在来種数と、サイト周辺(半径1km円内)の森林面積比率との関係

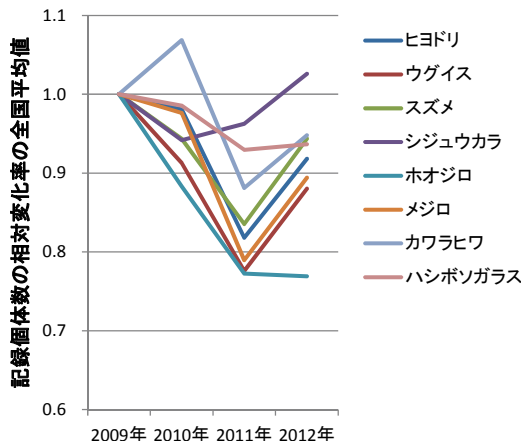


図2. 個体数の多い主要な留鳥の個体数の全国傾向。各サイトでのそれぞれの種の相対的な個体数変化率を全国平均した。

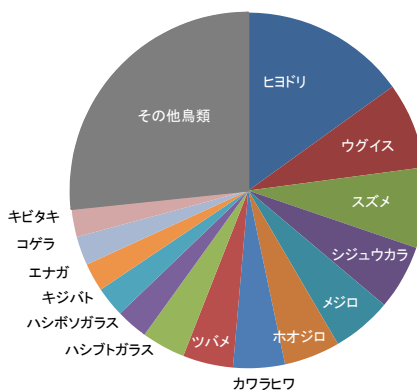


図3. 里地サイトで記録される鳥類のそれぞれの種の優占度(全個体数に占める比率)。91サイトの記録を全国平均して算出した。

ラ、メジロなどとなっています(図3)。

今後データが蓄積されれば、例えばシカの増加や外来哺乳類の侵入による鳥類への影響や、チョウ類の個体数変化と昆虫食の鳥類の個体数の変化の関係性など、これまでにないような様々な知見が得られると期待しています。しかし一方で、里地調査のサイトは数が少なく、また都市近郊に集中しているという問題点もあります。里地と森林・草原のデータを組み合わせて活用することで、全国的な傾向や細かな経年変動をより明確に捉えられると思われます。またデータだけでなく、現場の調査員やサイトの交流・相互協力を図ることも今後重要です。調査員不足で鳥類調査を断念している里地サイトでの調査に協力いただいたり、里地サイトがほとんどない地域で里地と森林・草原の調査員が結果を共有したり連携して成果発信ができれば、よりよい調査データの取得・活用や調査体制の強化につながると思います。

里地調査では今年11月10日に全国サイト交流会を大阪市I-siteなんばにて開催しますので、ご興味のある方は是非ご参加ください(詳細が決まり次第下記ウェブサイトに掲載します)。また、里地サイトの調査に参加・協力してみたい!というかたはいつでも里地調査事務局までご連絡ください。

メール: moni1000satochi@nacsj.or.jp

URL: nacsj.or.jp/project/moni1000/

事務局からのお知らせ

モニタリングサイト1000

研修・交流会のご案内

葉山政治(日本野鳥の会)・植田陸之(バードリサーチ)

モニタリングサイト1000の事業も今年から第3期に入りました。陸生鳥類調査ではこれまで、モニタリングサイト1000の事業紹介と調査方法の共有のための研修会を全国各地で行なって来ました。市民によるモニタリングとして事業を進めている陸生鳥類調査では事業の継続のために調査員の確保とモチベーションの維持は欠かせないものです。これまでの研修会でも、鳥類の調査に関心はあるが経験のない方にも参加いただき、新たな調査員として調査に参加いただいている方もおられます。

これまでの研究会で調査方法についてはほぼ伝わったと思いますので、第3期の最初の年となる今年度からは、調査手法の講習のウェイトをおとして、各地域で様々な調査・モニタリングをされている方の交流会的な内容を加えて実施することにしました。これによって調査活動そのものに関心を持っていただける方の活動がより活発になればと考えております。

今年は試験的に多くの方の集まりやすい、都市を選んでの実施を検討しております。詳細な実施日や会場はこれから調整し、後日またご案内いたします。

研修・交流会開催予定

開催都市:福岡, 大阪, 東京, 仙台

1日目 午後開始

- ・モニタリングサイト1000の成果の報告
- ・参加者相互の調査活動の発表
- ・懇親会

2日目 午前中

- ・モニ1000調査方法の体験



担当者紹介

日本野鳥の会の担当に荒が、バードリサーチの担当に笠原が加わりました。

日本野鳥の会

荒哲平と申します。3月まで岩手大学院農学研究科でクマガラを中心にキツツキ類の生態を研究していました。4月から日本野鳥の会自然保護室に配属となり、モニタリングサイト1000に関わらせていただくことになりました。森林・草原サイトでの調査やデータ集計のほか、調査員の方々との連絡役を務めております。先日、一般サイトの調査で故郷である福島県に出向いたのですが、ガビチョウの多さにとても驚きました。外来種の分布拡大は、全国的な長期調査ではじめて明らかにできるものです。このような大きな事業は、多くの方々が調査にご参加いただくことにより成り立っています。今後とも皆様のご協力をよろしくお願い致します。



バードリサーチ

今年4月からバードリサーチに入りました笠原里恵です。学部時代、サークルの先輩に「一緒に鳥を見に行かんか？」と誘われたのがこの世界の入り口でした。学部では北陸で里山の鳥類群集を、修士課程と博士課程では、河川の鳥類群集と増水との関わりについて、シギ・チドリ類、カワセミ類、モズ、オオヨシキリなどを対象に研究しました。その後、スズメの研究にも携わりました。「人間の生活と鳥たちの利用環境との関係」に興味があります。群集を研究してきた経験は、モニタリングサイト1000の結果解析でも役に立つと思いますので、調査からわかった面白いことを今後、このニューズレターなどでご報告できたらと思います。

